

氏名(本籍)	わか ばやし けい こ 若 林 敬 子 (千葉県)
学位の種類	博 士 (社会学)
学位記番号	博 乙 第 1,106 号
学位授与年月日	平成 7 年 7 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
審査研究科	社会科学 研究科
学位論文題目	中国の人口問題に関する社会学的研究
主 査	筑波大学教授 駒 井 洋
副 査	筑波大学教授 菱 山 謙 二
副 査	筑波大学助教授 樽 川 典 子

## 論 文 の 要 旨

地球レベルで人類が直面している大きな問題として、環境・人権・人口・社会開発などがあげられるが、なかでも人口は環境とともにきわめて問題解決のための緊急性が高い。世界的人口問題を左右するのは最大の人口をもつ中国である。本論文は中国の人口問題を人口社会学的見地から総合的・理論的に把握しようとする試みである。

中国が直面しようとしている人口問題は、①人口総数・総量の抑制、②人口の資質・優生の向上、③農業余剰労働力の吸収、④一人っ子政策の帰結としての人口高齢化への対処の四つに大別される。本論文はこれら四つの問題を整理するために、I-V章と「おわりに」から構成されている。

「世界人口の推移」と題される第I章は、地球的規模の人口問題を提示しながらその中に中国を位置づけようとしており、本論文の理論的部分にあたる。世界人口の「大爆発」は主として第三世界で起こっている。それにたいして先進諸国および日本では、出生率が低下している。第三世界における人口抑制は、政治的・宗教的理由もあってきわめて困難である。そこで第三世界の巨大都市の出現から国際人口移動へという流れが起こることになる。

「人口問題に直面する中国」と題される第II章は、中国の人口問題を歴史的に検討しながら上記四問題の各論への橋渡しをしようとする部分であり、いわば中国に関する総論にあたる。ここでは人口増大の放置から1979年の人口抑制政策への転換の背景と帰結が述べられる。人口学者として馬寅初は人口抑制の重要性を主張したが、毛沢東により抑圧された。馬の復権以降人口抑制は一人っ子政策として展開されることになる。

「家族制度への影響」と題される第III章は、一人っ子政策にたいする抵抗とこの政策の影響を、主として農村を対象として分析している。農村部においては大家族が理想とされしかも女兒に比して男児が尊重されていたため、性比が不均等となり戸籍のない子供が増大した。具体的にいえば、女兒は中絶されたのである。この政策の影響として人口高齢化が急速に進展していること、ならびに高齢者の扶養問題が急浮上していることがあげられる。

「広がる地域格差と人口流動化」と題される第IV章では、7大都市の膨張が地方における農業余剰労働の顕在化の結果であること、この余剰労働力が「盲流」もしくは「民工潮」として巨大な規模で7大都市に向かっていること、その結果、一人っ子政策を崩す「超過出産ゲリラ世帯」が発生するとともに、国内移動を原則的に禁止していた戸籍制度が形骸化しはじめていることが明らかにされる。具体的には食料切符制度の徐々の廃止などの

措置が取られている。これは7大都市の側での労働力需要を反映するものでもある。

「国際人口流出」と題される第V章では、中国の人口圧力により人口が国外流出に向かう過程が検討されている。歴史的な華僑の流出、香港への流入とそこからの再流出及びUターン、私用出国の緩和、労働力輸出政策等が概観される。日本に向う就学生名目の偽装就労者や偽装難民は、このような流れの一環として位置づけられる。

「おわりに」では、1994年の国連による国際人口開発会議の経過および1995年の北京女性会議の準備状況の整理を通じて、中国の人口問題の展望を提示しようとする。「性と生殖に関する権利および健康」を直接的に中国に適用することは難しいにせよ、女性の立場の強化が人口問題の解決の基礎となるのは当然である。しかしながら、中国にあっては国家・社会のマクロな要請と女性の出産権とが対立しあっており、その一致点を見いだすまでにはまだ距離がある。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、①中国の人口問題についてのわが国における最高水準の業績であること、②人口社会学的にも体系的な理論の提示に成功していること、③中国の事例から地球レベルでの人口問題の解決のための多大な示唆をしていることの3点から高く評価できるものである。

①については、中国の基礎的資料を網羅的に参照し、また19回にわたる現地調査とそれにもなうインタビューなどで、データの危なげがないことを追記したい。

②については、欧米の人口論に関する代表的理論を渉猟して家族・農村・都市・国外を一貫する人口社会学のひとつの体系を提示することに成功している。

③については、強権的な人口統制から女性の立場の強化による人口抑制へという流れを中国の人口に関する分析から導きだしている点が注目される。

但し、論旨の展開に若干一貫性の欠く部分が散見され、また「おわりに」の部分では人口流動に対する女性の関わりについての理論化がやや不十分であるが、本論文の価値を損なうほどのものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。